



ネットワーク アドレス変換の設定

- [ネットワークアドレス変換に関する情報 \(1 ページ\)](#)
- [NAT の設定 \(13 ページ\)](#)
- [NAT の設定例 \(27 ページ\)](#)
- [NAT のトラブルシューティング \(28 ページ\)](#)
- [ネットワークアドレス変換の機能履歴 \(29 ページ\)](#)

ネットワークアドレス変換に関する情報

ここでは、ネットワークアドレス変換 (NAT) について説明します。

Network Address Translation (NAT)

ネットワーク アドレス変換 (NAT) は、IP アドレスの節約を目的として設計されています。NAT によって、未登録 IP アドレスを使用するプライベート IP ネットワークをインターネットに接続できます。NAT はデバイス (通常、2つのネットワークを接続するもの) 上で動作し、別のネットワークにパケットを転送する前に、内部ネットワークのプライベート (グローバルに一意ではない) アドレスをグローバルにルート可能なアドレスに変換します。

NAT では、外部にアドバタイズするアドレスをネットワーク全体で1つだけにする機能を備えています。この機能により、そのアドレスの後ろにある内部ネットワーク全体を効果的に隠すことができ、セキュリティが強化されます。NAT には、セキュリティおよびアドレス節約の二重の機能性があり、一般的にリモートアクセス環境で実装されます。

NAT は、エンタープライズ エッジでも使用され、内部ユーザーのインターネットへのアクセスを許可し、メール サーバーなど内部デバイスへのインターネット アクセスを許可します。

NAT の設定の利点

- IP が枯渇する問題を解決します。

組織が NAT を使用すると、既存のネットワークを持っていてインターネットにアクセスする必要がある場合に、IP アドレスが枯渇する問題を解決できます。ネットワーク イン

フォメーションセンター（NIC）に登録されたIPアドレスをまだ持っていないサイトは、IPアドレスを取得する必要があります。255以上のクライアントが存在する、またはそのような環境を予定している場合は、Class Bアドレスの不足が深刻な問題になります。NATはこのような問題に対応するために、隠された数千の内部アドレスを、取得の容易なClass Cアドレスの範囲にマップします。

- クライアントIPアドレスを外部ネットワークから隠すことで、セキュリティレイヤも提供します。

内部ネットワークのクライアントのIPアドレスをすでに登録しているサイトでも、ハッカーがクライアントを直接攻撃できないように、これらのアドレスをインターネットから隠すことができます。クライアントアドレスを隠すことにより、セキュリティがさらに強化されます。NATによりLAN管理者は、インターネット割り当て番号局の予備プールを利用して、Class Aアドレスを自由に拡張することができます。Class Aアドレスの拡張は組織内で行われ、LANまたはインターネットインターフェイスでアドレッシングの変更は考慮する必要はありません。

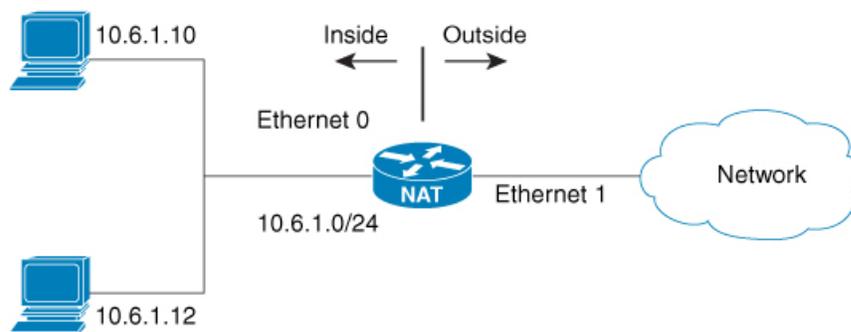
- Cisco ソフトウェアは、選択的、またはダイナミックにNATを実行できます。この柔軟性により、ネットワーク管理者はRFC 1918 アドレスまたは登録したアドレスを使用することができます。
- NAT は、IP アドレスの簡略化や節約のためにさまざまなデバイス上で使用できるように設計されています。また、NATにより、変換に使用できる内部ホストを選択することもできます。
- NAT は、NAT を設定する若干のデバイス以外には、何ら変更を加えずに設定できるという大きな利点があります。

NATの機能

NAT が設定されたデバイスには、内部ネットワークと外部ネットワークのそれぞれに接続するインターフェイスが少なくとも1つずつあります。標準的な環境では、NAT はスタブドメインとバックボーン間の出口デバイスに設定されます。パケットがドメインから出て行くとき、NAT はローカルで意味のある送信元アドレスをグローバルで一意的なアドレスに変換します。パケットがドメインに入ってくる際は、NAT はグローバルに一意的な宛先アドレスをローカルアドレスに変換します。複数の内部ネットワークをデバイスに接続でき、同様にデバイスから外部ネットワークへと複数の終了ポイントが存在する場合があります。アドレスが足りなくなって、パケットにアドレスを割り当てられなくなった場合、NATはそのパケットをドロップし、Internet Control Message Protocol (ICMP) ホスト到達不能パケットをその接続先に送信します。

変換および転送は、ハードウェアのスイッチングプレーンで実行され、全体的なスループットのパフォーマンスが改善されます。パフォーマンスの詳細については、「NAT のパフォーマンスとスケール数」を参照してください。

図 1: NAT



NAT の用途

NAT は次のような場合に使用できます。

- ホストのごく少数しかグローバルな一意の IP アドレスを持っていない状況でインターネットに接続する場合。

NAT はスタブ ドメイン（内部ネットワーク）と、インターネットなどのパブリック ネットワーク（外部ネットワーク）との境界にあるデバイス上に設定されます。NAT はパケットを外部ネットワークに送信する前に、内部のローカルアドレスをグローバルに一意の IP アドレスに変換します。接続性の問題への解決策として NAT が役立つのは、スタブ ドメイン内の比較的少数のホストが同時にドメインの外部と通信する場合のみです。この場合、外部との通信が必要なときに、このドメインにある IP アドレスのごく一部をグローバルに一意な IP アドレスに変換する必要があります。また、これらのアドレスは再利用できます。

- 番号付け直し：

内部アドレスの変更には相当の工数がかかるため、変更する代わりに NAT を使用して変換することができます。

NAT の内部アドレスおよび外部アドレス

NAT において、内部という用語は、変換が必要な組織が所有するネットワークを表します。NAT が設定されている場合、このネットワーク内のホストは、別の空間（グローバルアドレス空間として知られている）にあるものとしてネットワークの外側に現れる 1 つ空間（ローカルアドレス空間として知られている）内のアドレスを持つことになります。

同様に、外部という用語は、スタブ ネットワークの接続先で、通常、その組織の制御下にはないネットワークを表します。外部ネットワーク内のホストを変換の対象にすることもできるため、これらのホストはローカルアドレスとグローバルアドレスを持つことができます。

NAT では、次の定義が使用されます。

- 内部ローカルアドレス：内部ネットワーク上のホストに割り当てられた IP アドレス。このアドレスは、多くの場合、NIC やサービスプロバイダにより割り当てられたルート可能な IP アドレスではありません。
- 内部グローバルアドレス：外部に向けて、1 つ以上の内部ローカル IP アドレスを表すグローバルなルート可能な IP アドレス（NIC またはサービスプロバイダにより割り当てられたもの）。
- 外部ローカルアドレス：内部ネットワークから見た外部ホストの IP アドレス。必ずしもルート可能な IP アドレスではありません。内部でルート可能なアドレス空間から割り当てられたものです。
- 外部グローバルアドレス：外部ネットワークに存在するホストに対して、ホストの所有者により割り当てられた IP アドレス。このアドレスは、グローバルにルート可能なアドレス、またはネットワーク空間から割り当てられます。
- 内部送信元アドレス変換：内部ローカルアドレスを内部グローバルアドレスに変換します。
- 外部送信元アドレス変換：外部グローバルアドレスを外部ローカルアドレスに変換します。
- スタティックポート変換：内部/外部ローカルアドレスの IP アドレスとポート番号を、対応する内部/外部グローバルアドレスの IP アドレスとポート番号に変換します。
- 特定のサブネットのスタティック変換：指定された内部/外部ローカルアドレスの範囲のサブネットを対応する内部/外部グローバルアドレスに変換します。
- ハーフ エントリ：ローカルおよびグローバルアドレス/ポート間のマッピングを表し、NAT モジュールの変換データベースで維持されます。ハーフ エントリは、設定されている NAT ルールに基づいて、静的または動的に作成できます。
- フル エントリ/フロー エントリ：特定のセッションに対応する一意のフローを表します。ローカルからグローバルへのマッピングに加えて、指定したフローを完全修飾する接続先情報も維持されます。フル エントリは常に動的に作成されて NAT モジュールの変換データベースで維持されます。

VRF 対応 NAT

NAT は通常、デフォルトまたはグローバルルーティング ドメインで動作するように設定されます。この機能により、内部および外部の NAT ドメインはデフォルトの VRF スペースに関連付けられ、適宜変換が行われます。ただし、NAT が VRF 設定で実行される必要がある特定のシナリオがあります。一般的なシナリオの1つには、重複するアドレス空間を持つプライベートネットワークの共有サービスアクセスを有効にすることが含まれます。こうしたシナリオでは、特定のプライベートネットワークを異なる VRF に配置し、重複するプライベートアドレスを一意のグローバルアドレスにマッピングする VRF 対応 NAT ルールを設定することで、グローバルサービスアクセスを実現できます。VRF が認識されることにより、プライベートネッ

トワークの VRF が考慮に含まれ、結果として NAT がアドレスおよびポートの変換を実行できるようになります。

VRF 対応 NAT では、次の変換シナリオがサポートされます。

- VRF からグローバルへの変換：この変換により、内部ドメインを特定の非デフォルト VRF に関連付けることができます。外部ドメインは暗黙的にデフォルトまたはグローバル VRF に存在すると見なされます。

NAT のタイプ

ネットワーク全体を表す 1 つのアドレスのみを外部にアドバタイズするように NAT を設定できます。これにより、内部ネットワークを外部から効果的に隠すことができるため、セキュリティがさらに強化されます。

NAT には次のタイプがあります。

- スタティック アドレス変換 (スタティック NAT)：ローカルアドレスとグローバルアドレスを 1 対 1 マッピングします。
- ダイナミック アドレス変換 (ダイナミック NAT)：未登録の IP アドレスを、登録済み IP アドレスのプールから取得した登録済み IP アドレスにマップします。
- オーバーロード/PAT：複数の未登録 IP アドレスを、複数の異なるレイヤ 4 ポートを使用して、1 つの登録済み IP アドレスにマップ (多対 1) します。この方法は、ポートアドレス変換 (PAT) とも呼ばれます。オーバーロードを使用することにより、使用できる正規のグローバル IP アドレスが 1 つのみでも、数千のユーザーをインターネットに接続することができます。

NAT による外部ネットワークへのパケットのルーティング (内部送信元アドレス変換)

自分が属するネットワークの外部と通信するときに、未登録の IP アドレスをグローバルで一意な IP アドレスに変換できます。

スタティックまたはダイナミック内部送信元アドレス変換は、次のようにして設定できます。

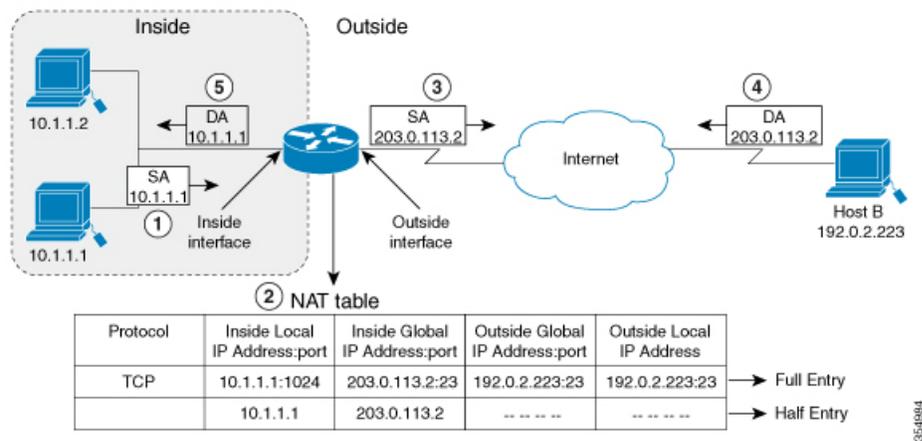
- スタティック変換は、内部ローカルアドレスと内部グローバルアドレスの間に 1 対 1 のマッピングを設定します。外部から固定アドレスを使って内部のホストにアクセスする必要がある場合には、スタティック変換が便利です。スタティック変換は、[内部送信元アドレスのスタティック変換の設定 \(14 ページ\)](#) で説明されているように、スタティック NAT ルールを設定して有効にできます。
- ダイナミック変換は、内部ローカルアドレスとグローバルアドレスのプールの間にマッピングを動的に設定します。ダイナミック変換は、ダイナミック NAT ルールを設定することで有効にできます。マッピングは、設定されているルールをランタイム時に評価した結果に基づいて設定されます。内部ローカルアドレスの指定には、標準と拡張の両方のアクセス コントロール リスト (ACL) を使用できます。内部グローバルアドレスはアドレ

スプールまたはインターフェイスから指定できます。ダイナミック変換は、[内部送信元アドレスのダイナミック変換の設定（15 ページ）](#)のセクションで説明されているようにダイナミックルールを設定して有効にできます。

デバイスでスタティック NAT ルールとダイナミック NAT ルールの両方を設定できます。両方のルールが相互に重複していて、特定のアドレスが両方のルールによる変換対象と見なされることもあります。このような場合、スタティックルールは、設定されている順序に関係なく、ダイナミックルールよりも優先されます。

次の図には、ネットワーク内の送信元アドレスを、ネットワーク外の変換先アドレスに変換するデバイスが示されています。

図 2: NAT 内部送信元変換



次のプロセスは、上の図に示す内部送信元アドレス変換について示します。

1. ホスト 10.1.1.1 のユーザーは、外部ネットワークのホスト B との接続を開きます。
2. NAT モジュールは、対応するパケットをインターセプトし、パケットを変換しようとしません。

一致する NAT ルールの有無に基づいて、次のシナリオが考えられます。

- 一致するスタティック変換ルールが存在する場合、パケットは対応する内部グローバルアドレスに変換されます。存在しない場合、パケットはダイナミック変換ルールに対して照合され、一致した場合は対応する内部グローバルアドレスに変換されます。NAT モジュールは、変換したパケットに対応する完全修飾フローエントリを変換データベースに挿入します。これにより、このフローに対応するパケットの高速変換および転送が双方向で促進されます。
- 一致するルールがない場合、パケットはアドレス変換を行わずに転送されます。
- 有効な内部グローバルアドレスを取得できない場合は、たとえ一致するルールがあってもパケットはドロップされます。



注 ダイナミック変換に ACL が使用される場合、NAT は ACL を評価し、特定の ACL で許可されているパケットのみが変換の対象になるようにします。

3. デバイスは、ホスト 10.1.1.1 の内部ローカル送信元アドレスをこの変換の内部グローバルアドレス 203.0.113.2 で置き換えて（パケットに関連したチェックサムのみが更新され、パケットの他のフィールドはすべて変更されません）、パケットを転送します。
4. NAT モジュールは、変換されたパケットフローに対応する完全修飾フローエントリを変換データベースに挿入します。その結果、このフローに対応するパケットの高速変換および転送が双方向で促進されます。
5. ホスト B はこのパケットを受信し、内部グローバル IP 宛先アドレス（DA）203.0.113.2 を使用して、ホスト 10.1.1.1 に応答します。
6. ホスト B からの応答パケットは、内部グローバルアドレスに送られます。NAT モジュールはこのパケットをインターセプトし、変換データベースにセットアップされているフローエントリを使って対応する内部ローカルアドレスに変換し直します。

ホスト 10.1.1.1 はパケットを受信し、会話を続けます。デバイスは、受信する各パケットについて手順 2～5 を実行します。

外部送信元アドレス変換

ネットワークの内部から外部に移動する IP パケットの送信元アドレスを変換できます。通常、このタイプの変換は、重複しているネットワークを相互接続するために、内部送信元アドレスの変換と組み合わせて使用されます。

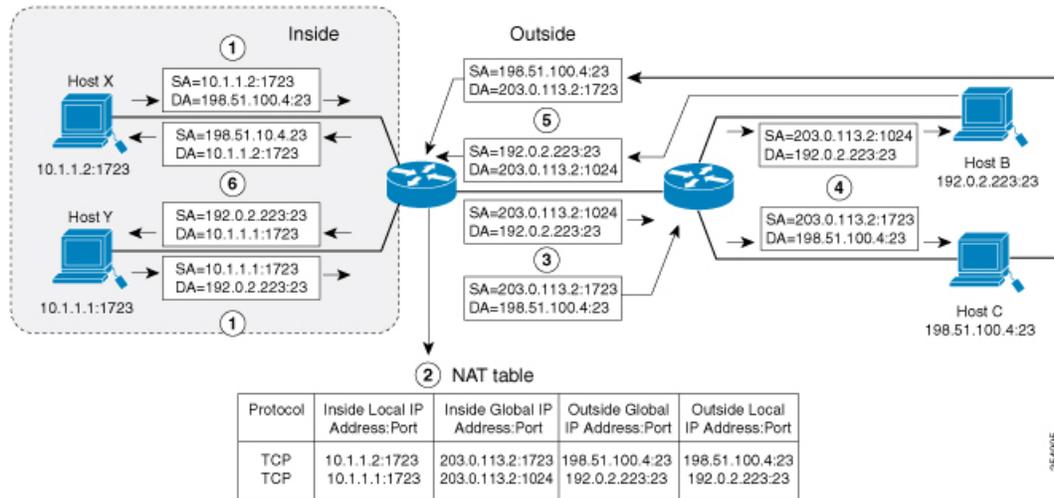
このプロセスについては、セクションで説明します。 [オーバーラップするネットワークの変換の設定 \(22 ページ\)](#)

ポート アドレス変換 (PAT)

デバイスが複数のローカルアドレスに対して 1 つのグローバルアドレスを使用できるようにすることで、内部グローバルアドレス プール内のアドレスを節約できます。このようなタイプの NAT の設定はオーバーロード、またはポート アドレス変換と呼ばれます。オーバーロードが設定されている場合、デバイスは、より高いレベルのプロトコルから十分な情報（たとえば、TCP または UDP ポート番号）を保持して、グローバルアドレスを正しいローカルアドレスに戻します。複数のローカルアドレスが 1 つのグローバルアドレスにマッピングされる場合、各内部ホストの TCP または UDP ポート番号によりローカルアドレスが区別されます。

次の図は、1 つの内部グローバルアドレスが複数の内部ローカルアドレスを表すときの NAT の動作を示しています。区別は、TCP ポート番号により行われます。

図 3: 内部グローバルアドレスをオーバーロードする PAT/NAT



このデバイスは、上の図に示すように、内部グローバルアドレスのオーバーロードで次の処理を行います。ホスト B およびホスト C はいずれも、アドレス 203.0.113.2 にある 1 つのホストと通信していると信じています。しかし、実際には、異なるホストと通信しています。区別にはポート番号が使用されます。つまり、多数の内部ホストは、複数のポート番号を使用して、内部グローバル IP アドレスを共有することができます。

1. ホスト Y のユーザーはホスト B への接続を開き、ホスト X のユーザーはホスト C への接続を開きます。

2. NAT モジュールは、対応するパケットをインターセプトし、パケットの変換を試みます。

一致する NAT ルールの有無に基づいて、次のシナリオが考えられます。

- 一致するスタティック変換ルールが存在する場合はそのルールが優先され、パケットは対応するグローバルアドレスに変換されます。存在しない場合、パケットはダイナミック変換ルールに対して照合され、一致した場合は対応するグローバルアドレスに変換されます。NAT モジュールは、変換したパケットに対応する完全修飾フローエントリを変換データベースに挿入し、このフローに対応するパケットの高速変換および転送を双方向で促進します。
- 一致するルールがない場合、パケットはアドレス変換を行わずに転送されます。
- 有効な内部グローバルアドレスを取得できない場合は、一致するルールがあってもパケットはドロップされます。
- これは PAT 設定であるため、トランスポートポートにより複数のフローを 1 つのグローバルアドレスに変換できます。(送信元アドレスに加えて送信元ポートも変換されるため、関連付けられているフローエントリは対応する変換マッピングを維持します。)

3. デバイスは、内部ローカル送信元アドレス/ポート 10.1.1.1/1723 および 10.1.1.2/1723 を対応する選択されたグローバルアドレス/ポート 203.0.113.2/1024 および 203.0.113.2/1723 にそれぞれ置き換えてパケットを転送します。
4. ホスト B はこのパケットを受信し、ポート 1024 で内部グローバル IP アドレス 203.0.113.2 を使用してホスト Y に応答します。ホスト C はこのパケットを受信し、ポート 1723 で内部グローバル IP アドレス 203.0.113.2 を使用してホスト X に応答します。
5. デバイスは、内部グローバル IP アドレスを持つパケットを受信すると、内部グローバルアドレスとポート、および外部アドレスとポートをキーとして NAT テーブル検索を実行します。次に、アドレスを内部ローカルアドレス 10.1.1.1:1723/10.1.1.2:1723 に変換し、パケットをホスト Y および X にそれぞれ転送します。

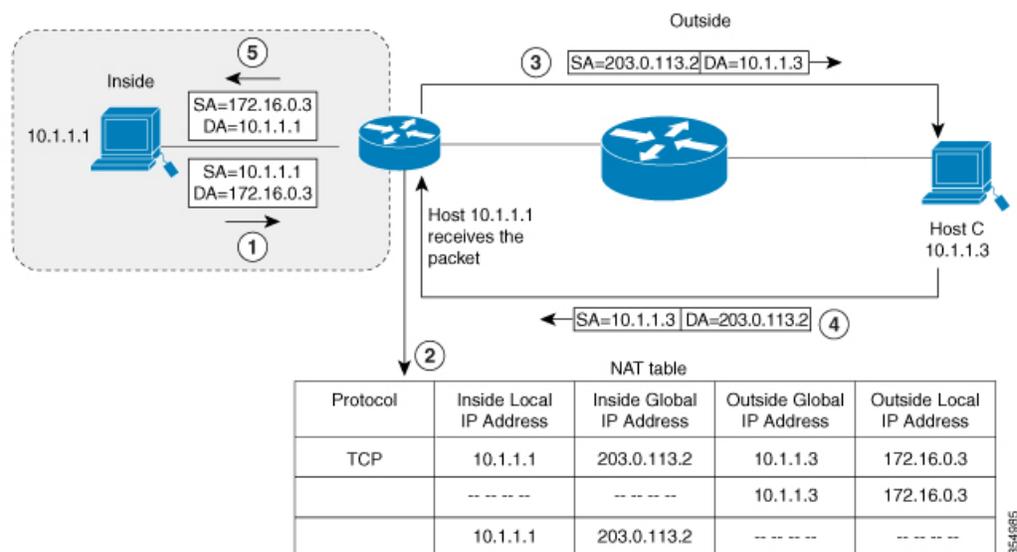
ホスト Y および X はパケットを受信し、通信を続行します。デバイスは、受信する各パケットについて手順 2～5 を実行します。

オーバーラップネットワーク

使用する IP アドレスが合法でない、または正式に割り当てられていない場合、IP アドレスを変換するために NAT を使用します。すでに合法的に所有されインターネットまたは外部ネットワーク上のデバイスに割り当てられている IP アドレスを、独自のネットワーク上の別のデバイスに割り当てると、ネットワークのオーバーラッピングが発生します。

次の図はオーバーラップしたネットワークを示しています。内部ネットワークと外部ネットワークの両方のローカル IP アドレスが同じです (10.1.1.x)。1 台の NAT デバイスを使用している場合、リモートピアのアドレス (10.1.1.3) を内部から見た別のアドレスに変換するには、そのようにオーバーラップしているアドレス空間の間のネットワーク接続を確立する必要があります。

図 4: NATによるオーバーラップするアドレスの変換



内部ローカルアドレス (10.1.1.1) および外部グローバルアドレス (10.1.1.3) が同じサブネットにあることに注意してください。オーバーラップするアドレスを変換するために、まず、内部送信元アドレスの変換によって内部ローカルアドレスが 203.0.113.2 に変換され、NAT テーブルにハーフ エントリが作成されます。受信側では、外部送信元アドレスが 172.16.0.3 に変換され、ハーフ エントリがもう 1 つ作成されます。すべての変換を完了し、NAT テーブルがフル エントリで更新されます。

次の手順は、オーバーラップするアドレスをデバイスが変換する方法を示します。

1. ホスト 10.1.1.1 は 172.16.0.3 への接続を開きます。
2. NAT モジュールは、内部ローカルアドレスと内部グローバルアドレスを相互に、また外部グローバルアドレスと外部ローカルアドレスを相互にマップする変換マッピングをセットアップします。
3. 送信元アドレス (SA) は、内部グローバルアドレスで置き換えられ、宛先アドレス (DA) は外部グローバルアドレスで置き換えられます。
4. ホスト C はパケットを受信し、会話を続けます。
5. デバイスは NAT テーブルの検索を行い、DA を内部ローカルアドレスで、SA を外部ローカルアドレスで置き換えます。
6. この変換プロセスを使用して、パケットがホスト 10.1.1.1 により受信され、会話が続けられます。

NAT の制限事項

- NAT の動作によっては、ハードウェアデータプレーンで現在サポートされていません。比較的遅いソフトウェア データ プレーンで実行される動作は次のとおりです。
 - Internet Control Message Protocol (ICMP) パケットの変換。
 - アプリケーション レイヤ ゲートウェイ (ALG) 処理を必要とするパケットの変換。
 - 内側と外側の両方で変換が必要なパケット。
- 理想的な設定のハードウェアで変換および転送できるセッションの最大数は、Cisco Catalyst 9500 シリーズ スイッチでは 7750。変換が必要なその他のフローは、スループットを下げてソフトウェア データ プレーンで処理されます。



注 変換ごとに TCAM の 2 つのエントリが使用されます。

- NAT トラフィックの場合、CPU キューの帯域幅制限は 2000 パケットです。この制限を超えるパケットはドロップされます。

- 設定されている NAT ルールは、リソースの制約のためにハードウェアにプログラムできない場合があります。これにより、特定のルールに該当するパケットが変換されずに転送されることがあります。
- ALG のサポートは、FTP、TFTP、および ICMP プロトコルに現在制限されています。また、TCP SYN、TCP FIN、および TCP RST は ALG トラフィックの一部ではありませんが、ALG トラフィックの一部として処理されます。
- ダイナミックに作成された NAT フローは、非アクティブな状態が一定期間続くとエージアウトします。
- ポリシーベースルーティング (PBR) と NAT は、同じインターフェイスではサポートされていません。PBR と NAT は、異なるインターフェイス上に設定されている場合にのみ連携します。
- ポート チャンネルは、NAT の設定でサポートされていません。
- NAT は、断片化されたパケットの変換をサポートしていません。
- Bidirectional Forwarding Detection (BFD) は、NAT 設定ではサポートされていません。
- 等コスト マルチパス ルーティング (ECMP) は、NAT でサポートされていません。
- ルートマップを設定された NAT はサポートされていないため、ルートマップを使用せずに NAT 設定を行う必要があります。
- NAT ACL の明示的な拒否アクセス制御エントリ (ACE) はサポートされていません。明示的な許可 ACE のみがサポートされます。

NAT のパフォーマンスとスケール数

NAT モジュールは、転送情報と書き換え情報を使用して関連したハードウェアテーブルをプログラミングすることで、ハードウェアの変換と転送をラインレートで実行できます。NAT のスループットを向上させるために、NAT 重視のリソース割り当てスキームを設定できます。

より良いパフォーマンスとスケール数が NAT で得られるように SDM テンプレートを設定します。次を参照してください。 [スイッチ データベース管理 \(SDM\) テンプレートの設定 \(26 ページ\)](#)

ハードウェアで使用可能な TCAM フローの最大数は 15500 です。



- (注) Cisco IOS XE Bengaluru 17.5.1 以降では、グローバルコンフィギュレーションモードで **natscale** コマンドを使用して、NAT スケールサポートを強化できます。有効にすると、NAT スループットは NAT 変換トラフィックのラインレートを下回ります。ただし、サポートされる最大 TCAM フローは 15500 のままです。



- (注) アドレスのみの変換を使用すると、フローの処理が最適化され、NAT 機能のスケールが拡張されます。

アドレスのみの変換

アドレスのみの変換 (AOT) 機能は、トランスポートポートではなくアドレスフィールドのみを変換する必要がある状況で使用できます。そのような状況で AOT 機能を有効にすると、ハードウェアにおいてラインレートで変換および転送できるフローの数が大幅に増加します。この改善は、変換および転送に関連したさまざまなハードウェアリソースの使用を最適化することによって実現されます。一般的な NAT 集中型リソース割り当てスキームでは、ハードウェア変換を実行するために 15500 の TCAM エントリが確保されます。その結果、ラインレートで変換および転送できるフローの数に厳密な上限が設定されます。AOT スキームでは、TCAM リソースの使用が高度に最適化されるため、TCAM テーブルでより多くのフローに対応できるようになり、ハードウェア変換および転送の規模が大幅に拡大します。AOT は、フローの大部分が単一または少数の宛先に送信される場合に非常に効果的です。そのような良好な条件下では、AOT により、特定のエンドポイントから発信されるすべてのフローのラインレート変換および転送が有効になる可能性があります。AOT 機能は、デフォルトでは無効になっています。no **ip nat create flow-entries** コマンドを使用して有効にできます。既存のダイナミックフローは、**clear ip nat translation** コマンドを使用してクリアできます。AOT 機能は、**ip nat create flow-entries** コマンドを使用して無効にできます。

アドレスのみの変換の制限事項

- AOT 機能は、単純な内部スタティックルールおよび内部ダイナミックルールに対応する変換シナリオでのみ正しく機能すると想定されています。単純なスタティックルールのタイプは **ip nat inside source static local-ip global-ip** で、ダイナミックルールのタイプは **ip nat inside source list access-list pool name** である必要があります。
- AOT が有効になっている場合、**show ip nat translation** コマンドを使用しても、変換および転送されるすべての NAT フローの可視性が実現することはありません。

NAT でのアプリケーション レベル ゲートウェイの使用

NAT は、アプリケーション データ ストリームで送信元および宛先 IP アドレスを伝送しない TCP/UDP トラフィックにおいて変換サービスを実行します。送信元および宛先 IP アドレスを伝送しないプロトコルには、HTTP、TFTP、telnet、archie、finger、Network Time Protocol (NTP)、ネットワーク ファイル システム (NFS)、リモートログイン (rlogin)、リモートシェル (rsh) protocol、およびリモート コピー (rcp) があります。

アドレス/ポート情報をペイロードで搬送するアプリケーションは、NAT アプリケーション レベル ゲートウェイ (ALG) により、NAT ドメイン全体で正しく機能できます。パケット ヘッ

ダ内のアドレス/ポートの通常の変換に加えて、ALGはペイロードに存在するアドレス/ポートの変換も処理し、一時マッピングを設定します。

NAT の設定のベスト プラクティス

- スタティックサブネット変換ルールが対応する完全修飾スタティックルールと重複する場合など、2つのスタティック NAT ルールが相互に重複する場合は、より具体的なルールを先に設定する必要があります。
- スタティック ルールとダイナミック ルールの両方が設定されている場合は、ルールに指定されているローカルアドレスがオーバーラップしていないことを確認してください。このようなオーバーラップの可能性がある場合は、スタティックルールが使用するアドレスをダイナミック ルールに関連付けられている ACL で除外してください。同様に、グローバルアドレス間のオーバーラップもなくする必要があります。オーバーラップしていると、望ましくない動作が生じることがあります。
- VRF からグローバルへの変換機能では、NAT 外部インターフェイスがデフォルトまたはグローバル VRF に関連付けられていると見なされます。したがって、VRF 対応 NAT の実行中は、NAT 外部インターフェイスをデフォルト以外の VRF に配置することは推奨されません。
- NAT ルールに関連付けられている ACL では、**permit ip any any** などのあいまいなフィルタリングを使用しないでください。このようなフィルタリングは、必要のないパケットを変換することがあります。
- 複数の NAT ルールでアドレス プールを共有しないでください。
- スタティック NAT とダイナミック プールで同じ内部グローバルアドレスを定義しないでください。これを行うと、望ましくない結果を招くことがあります。
- NAT に関連付けられているデフォルトのタイムアウト値を変更する場合は、慎重に行ってください。タイムアウト値を短くすると、CPU の使用率が高くなることがあります。
- 変換エントリを手動でクリアする場合は、アプリケーションセッションが中断されることがあるため、慎重に行ってください。
- NAT 対応インターフェイスを通過する ALG パケットは、パケットが変換されるかどうかに関係なく、CPU にパントされます。そのため、NAT トラフィック専用のインターフェイスを使用することをお勧めします。NAT 変換する必要がない他のタイプのトラフィックにはすべて、別のインターフェイスを使用します。

NAT の設定

このセクションで説明するタスクを使用して、NAT を効果的に設定できます。設定によっては、複数の作業を実行する必要があります。

内部送信元アドレスのスタティック変換の設定

内部ローカルアドレスと内部グローバルアドレス間の1対1マッピングを可能にするには、内部送信元アドレスのスタティック変換を設定します。外部から固定アドレスを使って内部のホストにアクセスする必要がある場合には、スタティック変換が便利です。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	enable 例： <pre>Switch> enable</pre>	特権 EXEC モードを有効にします。 パスワードを入力します（要求された場合）。
ステップ 2	configure terminal 例： <pre>Switch# configure terminal</pre>	グローバル コンフィギュレーションモードを開始します。
ステップ 3	要件に応じて次のコマンドのいずれかを使用します。 <ul style="list-style-type: none"> • ip nat inside source static local-ip global-ip <pre>Switch(config)# ip nat inside source static 10.10.10.1 172.16.131.1</pre> • ip nat inside source static protocol local-ip port global-ip port <pre>Switch(config)# ip nat inside source static tcp 10.10.10.1 1234 172.16.131.1 5467</pre> • ip nat inside source static network local-ip global-ip { prefix_len len subnet subnet-mask } <pre>Switch(config)# ip nat inside source static network 10.10.10.1 172.16.131.1 prefix_len 24</pre> • ip nat inside source static local-ip global-ip vrf vrf-name <pre>Switch(config)# ip nat inside source static 10.10.10.1 172.16.131.1 vrf vrf1</pre> 	<ul style="list-style-type: none"> • 内部ローカルアドレスと内部グローバルアドレス間のスタティック変換を設定します。 • 内部ローカルアドレスと内部グローバルアドレス間のスタティックポート変換を設定します。 • 複数の個別変換ルールを指定せずに、サブネット全体のスタティック変換マッピングを許可します。目的のサブネットの変換マッピングを指定できます。実際の変換は、アドレスのネットワーク部を変換することによって実行されます。ホスト部は変更されません。 • スタティック変換 VRF を認識させ、特定のルールを指定された VRF に関連付けます。
ステップ 4	interface type number 例： <pre>Switch(config)# interface ethernet 1</pre>	インターフェイスを指定し、インターフェイスコンフィギュレーションモードを開始します。

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 5	ip address ip-address mask [secondary] 例： Switch(config-if)# ip address 10.114.11.39 255.255.255.0	インターフェイスのプライマリ IP アドレスを設定します。
ステップ 6	ip nat inside 例： Switch(config-if)# ip nat inside	NAT の対象である内部ネットワークにインターフェイスを接続します。
ステップ 7	exit 例： Switch(config-if)# exit	インターフェイス設定モードを終了し、グローバル設定モードに戻ります。
ステップ 8	interface type number 例： Switch(config)# interface gigabitethernet 0/0/0	異なるインターフェイスを指定し、インターフェイスコンフィギュレーションモードを開始します。
ステップ 9	ip address ip-address mask [secondary] 例： Switch(config-if)# ip address 172.31.232.182 255.255.255.240	インターフェイスのプライマリ IP アドレスを設定します。
ステップ 10	ip nat outside 例： Switch(config-if)# ip nat outside	外部ネットワークにインターフェイスを接続します。
ステップ 11	end 例： Switch(config-if)# end	インターフェイス コンフィギュレーションモードを終了し、特権 EXEC モードに戻ります。

内部送信元アドレスのダイナミック変換の設定

ダイナミック変換は、内部ローカルアドレスとグローバルアドレスのプールの間にマッピングを動的に設定します。ダイナミック変換は、ダイナミック NAT ルールを設定することで有効にできます。マッピングは、設定されているルールをランタイム時に評価した結果に基づいて設定されます。内部ローカルアドレスの指定には ACL を使用できます。また、内部グローバルアドレスは、アドレスプール、またはインターフェイスから指定できます。

プライベートネットワークに存在する複数のユーザーがインターネットへのアクセスを必要としている場合には、ダイナミック変換が便利です。ダイナミックに設定されたプール IP アドレスは必要に応じて使用でき、インターネットへのアクセスがなくなるときは別のユーザーが使用できるようにリリースできます。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	enable 例： Switch> enable	特権 EXEC モードを有効にします。 パスワードを入力します（要求された場合）。
ステップ 2	configure terminal 例： Switch# configure terminal	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 3	ip nat pool name start-ip end-ip netmask netmask prefix-length prefix-length 例： Switch(config)# ip nat pool net-208 172.16.233.208 172.16.233.223 prefix-length 28	必要に応じて割り当てられるグローバルアドレスのプールを定義します。
ステップ 4	access-list access-list-number permit source [source-wildcard] 例： Switch(config)# access-list 1 permit 192.168.34.0 0.0.0.255	変換されるアドレスを許可する標準アクセス リストを定義します。
ステップ 5	ip nat inside source list access-list-number pool name vrf vrf-name 例： Switch(config)# ip nat inside source list 1 pool net-208	ステップ 4 で定義したアクセス リストを指定して、ダイナミック送信元変換を設定します。 vrf キーワードを使用すると、ダイナミック変換 VRF が認識され、特定のルールが指定された VRF に関連付けられます。
ステップ 6	interface type number 例： Switch(config)# interface ethernet 1	インターフェイスを指定し、インターフェイス コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 7	ip address ip-address mask 例： Switch(config-if)# ip address 10.114.11.39 255.255.255.0	インターフェイスのプライマリ IP アドレスを設定します。
ステップ 8	ip nat inside 例： Switch(config-if)# ip nat inside	NAT の対象である内部ネットワークにインターフェイスを接続します。

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 9	exit 例： Switch(config-if)#exit	インターフェイス コンフィギュレーションモードを終了し、グローバルコンフィギュレーションモードに戻ります。
ステップ 10	interface type number 例： Switch(config)# interface ethernet 0	インターフェイスを指定し、インターフェイス コンフィギュレーションモードを開始します。
ステップ 11	ip address ip-address mask 例： Switch(config-if)# ip address 172.16.232.182 255.255.255.240	インターフェイスのプライマリ IP アドレスを設定します。
ステップ 12	ip nat outside 例： Switch(config-if)# ip nat outside	外部ネットワークにインターフェイスを接続します。
ステップ 13	end 例： Switch(config-if)# end	インターフェイス コンフィギュレーションモードを終了し、特権 EXEC モードに戻ります。

PAT の設定

グローバルアドレスのオーバーロードによる PAT の設定

NAT モジュールは、次のタスクで説明するように、アドレスプールとインターフェイスを介してダイナミック PAT 設定をサポートします。

グローバルアドレスのオーバーロードを使用して、内部ユーザーにインターネットへのアクセスを許可し、内部グローバルアドレスプールのアドレスを節約するには、次の作業を実行します。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	enable 例： Switch> enable	特権 EXEC モードを有効にします。 パスワードを入力します（要求された場合）。
ステップ 2	configure terminal 例：	グローバル コンフィギュレーションモードを開始します。

	コマンドまたはアクション	目的
	Switch# configure terminal	
ステップ 3	ip nat pool name start-ip end-ip netmask netmask prefix-length prefix-length 例： Switch(config)# ip nat pool net-208 192.168.202.129 192.168.202.158 netmask 255.255.255.224	必要に応じて割り当てられるグローバルアドレスのプールを定義します。
ステップ 4	access-list access-list-number permit source [source-wildcard] 例： Switch(config)# access-list 1 permit 192.168.201.30 0.0.0.255	変換されるアドレスを許可する標準アクセスリストを定義します。 アクセスリストは、変換されるアドレスだけを許可する必要があります（各アクセスリストの最後に暗黙の「deny all」ステートメントが存在することに注意してください）。許可が多すぎるアクセスリストを使用すると、予測困難な結果を招くことがあります。
ステップ 5	ip nat inside source list access-list-number pool name [vrf vrf-name] overload 例： Switch(config)# ip nat inside source list 1 pool net-208 overload	手順 4 で定義されたアクセスリストを指定して、ダイナミック送信元変換を設定します。 vrf キーワードを使用すると、ダイナミック変換 VRF が認識され、特定のルールが指定された VRF に関連付けられます。
ステップ 6	interface type number 例： Switch(config)# interface ethernet 1	インターフェイスを指定し、インターフェイスコンフィギュレーションモードを開始します。
ステップ 7	ip address ip-address mask [secondary] 例： Switch(config-if)# ip address 192.168.201.1 255.255.255.240	インターフェイスのプライマリ IP アドレスを設定します。
ステップ 8	ip nat inside 例： Switch(config-if)# ip nat inside	NAT の対象である内部ネットワークにインターフェイスを接続します。
ステップ 9	exit 例： Switch(config-if)# exit	インターフェイス設定モードを終了し、グローバル設定モードに戻ります。

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 10	interface <i>type number</i> 例： Switch(config)# interface ethernet 0	異なるインターフェイスを指定し、インターフェイスコンフィギュレーションモードを開始します。
ステップ 11	ip address <i>ip-address mask [secondary]</i> 例： Switch(config-if)# ip address 192.168.201.29 255.255.255.240	インターフェイスのプライマリ IP アドレスを設定します。
ステップ 12	ip nat outside 例： Switch(config-if)# ip nat outside	外部ネットワークにインターフェイスを接続します。
ステップ 13	end 例： Switch(config-if)# end	インターフェイス コンフィギュレーションモードを終了し、特権 EXEC モードに戻ります。

インターフェイスのオーバーロードによる PAT の設定

インターフェイスのオーバーロードにより、内部ユーザーにインターネットへのアクセスを許可し、内部グローバルアドレスプールのアドレスを節約するには、次の作業を実行します。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	enable 例： Switch> enable	特権 EXEC モードを有効にします。 パスワードを入力します（要求された場合）。
ステップ 2	configure terminal 例： Switch# configure terminal	グローバル コンフィギュレーションモードを開始します。
ステップ 3	access-list <i>access-list-number permit source [source-wildcard]</i> 例： Switch(config)# access-list 1 permit 192.168.201.30 0.0.0.255	変換されるアドレスを許可する標準アクセスリストを定義します。 アクセスリストは、変換されるアドレスだけを許可する必要があります（各アクセスリストの最後に暗黙の「deny all」ステートメントが存在することに注意してください）。許可が多すぎるアクセスリストを使用すると、予測困難な結果を招くことがあります。

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 4	ip nat inside source list <i>access-list-number</i> interface <i>name</i> overload 例 : <pre>Switch(config)# ip nat inside source list 1 interface gigabitethernet0/0/2 overload</pre>	手順 3 で定義されたアクセス リストを指定して、ダイナミック送信元変換を設定します。 (注) オーバーロード用に、有効な IP アドレスを持つ、動作状態にある任意のレイヤ 3 インターフェイスを選択できます。
ステップ 5	interface <i>type number</i> 例 : <pre>Switch(config)# interface gigabitethernet0/0/1</pre>	インターフェイスを指定し、インターフェイス コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 6	ip address <i>ip-address mask</i> [secondary] 例 : <pre>Switch(config-if)# ip address 192.168.201.1 255.255.255.240</pre>	インターフェイスのプライマリ IP アドレスを設定します。
ステップ 7	ip nat inside 例 : <pre>Switch(config-if)# ip nat inside</pre>	NAT の対象である内部ネットワークにインターフェイスを接続します。
ステップ 8	exit 例 : <pre>Switch(config-if)# exit</pre>	インターフェイス設定モードを終了し、グローバル設定モードに戻ります。
ステップ 9	interface <i>type number</i> 例 : <pre>Switch(config)# interface gigabitethernet0/0/2</pre>	異なるインターフェイスを指定し、インターフェイス コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 10	ip address <i>ip-address mask</i> [secondary] 例 : <pre>Switch(config-if)# ip address 192.168.201.29 255.255.255.240</pre>	インターフェイスのプライマリ IP アドレスを設定します。
ステップ 11	ip nat outside 例 : <pre>Switch(config-if)# ip nat outside</pre>	外部ネットワークにインターフェイスを接続します。
ステップ 12	end 例 : <pre>Switch(config-if)# end</pre>	インターフェイス コンフィギュレーション モードを終了し、特権 EXEC モードに戻ります。

外部 IP アドレスのみの NAT の設定

デフォルトで NAT は、[NAT でのアプリケーション レベル ゲートウェイの使用 \(12 ページ\)](#) で説明されているように、パケットのペイロードに埋め込まれているアドレスを変換します。埋め込みアドレスを変換することが望ましくない場合は、外部の IP アドレスのみを変換するように NAT を設定できます。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	enable 例： Device> enable	特権 EXEC モードを有効にします。 <ul style="list-style-type: none"> パスワードを入力します（要求された場合）。
ステップ 2	configure terminal 例： Device# configure terminal	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 3	ip nat inside source {list {access-list-number access-list-name} pool pool-name [overload] static network local-ip global-ip [no-payload]} 例： Device(config)# ip nat inside source static network 10.1.1.1 192.168.251.0/24 no-payload	内部ホストデバイスでのネットワーク パケット変換を無効化します。
ステップ 4	ip nat inside source {list {access-list-number access-list-name} pool pool-name [overload] static {tcp udp} local-ip local-port global-ip global-port [no-payload]} 例： Device(config)# ip nat inside source static tcp 10.1.1.1 2000 192.168.1.1 2000 no-payload	内部ホストデバイスでのポートパケット変換を無効化します。
ステップ 5	ip nat inside source {list {access-list-number access-list-name} pool pool-name [overload] static [network] local-network-mask global-network-mask [no-payload]} 例： Device(config)# ip nat inside source static 10.1.1.1 192.168.1.1 no-payload	内部ホストルータでのパケット変換を無効化します。

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 6	ip nat outside source {list {access-list-number access-list-name} pool pool-name static local-ip global-ip [no-payload]} 例 : <pre>Device(config)# ip nat outside source static 10.1.1.1 192.168.1.1 no-payload</pre>	外部ホストルータでのパケット変換を無効化します。
ステップ 7	ip nat outside source {list {access-list-number access-list-name} pool pool-name static {tcp udp} local-ip local-port global-ip global-port [no-payload]} 例 : <pre>Device(config)# ip nat outside source static tcp 10.1.1.1 20000 192.168.1.1 20000 no-payload</pre>	外部ホストデバイスでのポートパケット変換を無効化します。
ステップ 8	ip nat outside source {list {access-list-number access-list-name} pool pool-name static [network] local-network-mask global-network-mask [no-payload]} 例 : <pre>Device(config)# ip nat outside source static network 10.1.1.1 192.168.251.0/24 no-payload</pre>	外部ホストデバイスでのネットワークパケット変換を無効化します。
ステップ 9	exit 例 : <pre>Device(config)# exit</pre>	グローバル コンフィギュレーション モードを終了し、特権 EXEC モードに戻ります。
ステップ 10	show ip nat translations [verbose] 例 : <pre>Device# show ip nat translations</pre>	アクティブな NAT を表示します。

オーバーラップするネットワークの変換の設定

スタブ ネットワーク内の IP アドレスが別のネットワークに属する正式な IP アドレスであるときに、スタティック変換を使用して、これらのホストやルータと通信する必要がある場合は、オーバーラップするネットワークのスタティック変換を設定します。



- (注) NAT 外部変換を成功させるためには、デバイスに外部ローカルアドレスのルートを設定する必要があります。ルートは手動で、または **ip nat outside source {static | list}** コマンドと関連付けられた **add-route** オプションを使用して設定できます。ルートの自動作成を有効にする **add-route** オプションを使用することを推奨します。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	enable 例： Switch> enable	特権 EXEC モードを有効にします。 パスワードを入力します（要求された場合）。
ステップ 2	configure terminal 例： Switch# configure terminal	
ステップ 3	ip nat inside source static local-ip global-ip 例： Switch(config)# ip nat inside source static 10.1.1.1 203.0.113.2	内部ローカルアドレスと内部グローバルアドレス間のスタティック変換を設定します。
ステップ 4	ip nat outside source static local-ip global-ip 例： Switch(config)# ip nat outside source static 172.16.0.3 10.1.1.3	外部ローカルアドレスと外部グローバルアドレス間のスタティック変換を設定します。
ステップ 5	interface type number 例： Switch(config)# interface ethernet 1	インターフェイスを指定し、インターフェイスコンフィギュレーションモードを開始します。
ステップ 6	ip address ip-address mask 例： Switch(config-if)# ip address 10.114.11.39 255.255.255.0	インターフェイスのプライマリ IP アドレスを設定します。
ステップ 7	ip nat inside 例： Switch(config-if)# ip nat inside	内部と接続されることを示すマークをインターフェイスに付けます。

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 8	exit 例： Switch(config-if)# exit	インターフェイス設定モードを終了し、グローバル設定モードに戻ります。
ステップ 9	interface type number 例： Switch(config)# interface ethernet 0	異なるインターフェイスを指定し、インターフェイスコンフィギュレーションモードを開始します。
ステップ 10	ip address ip-address mask 例： Switch(config-if)# ip address 172.16.232.182 255.255.255.240	インターフェイスのプライマリ IP アドレスを設定します。
ステップ 11	ip nat outside 例： Switch(config-if)# ip nat outside	外部と接続されることを示すマークをインターフェイスに付けます。
ステップ 12	end 例： Switch(config-if)# end	インターフェイス コンフィギュレーションモードを終了し、特権 EXEC モードに戻ります。

アドレス変換タイムアウトの設定

NAT の設定に基づき、アドレス変換のタイムアウトを設定できます。

デフォルトでは、ダイナミックに作成された変換エントリは、さまざまなリソースを効率的に利用できるようにするために、非アクティブな状態が一定時間続くとタイムアウトします。必要に応じて、タイムアウトのデフォルト値を変更できます。主な変換タイプに関連付けられているデフォルトのタイムアウト設定は、次のとおりです。

- 確立された TCP セッション：24 時間
- UDP フロー：5 分
- ICMP フロー：1 分

デフォルトのタイムアウト値は、ほとんどの展開シナリオでタイムアウト要件を満たすことができます。ただし、これらの値は必要に応じて調整/微調整できます。短いタイムアウト値を設定すると（60 秒未満）、CPU の使用率が高くなる可能性があるため推奨されません。詳細については、[NAT の設定のベスト プラクティス（13 ページ）](#) を参照してください。

この項で説明するタイムアウトは、設定に応じて変更できます。

- ダイナミック設定のためにグローバル IP アドレスを迅速に解放する必要がある場合は、**ip nat translation timeout** コマンドを使用して、デフォルトのタイムアウトよりもタイムア

ウトを短く設定してください。ただし、次の手順で指定するコマンドで設定した他のタイムアウトよりも長い時間にしてください。

- TCPセッションが両側から受け取る終了 (FIN) パケットで正しく終了していない場合、またはリセット時に正しく終了しない場合は、**ip nat translation tcp-timeout** コマンドを使用してデフォルトの TCP タイムアウトを変更してください。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	enable 例： Switch> enable	特権 EXEC モードを有効にします。 パスワードを入力します (要求された場合)。
ステップ 2	configure terminal 例： Switch# configure terminal	グローバル コンフィギュレーションモードを開始します。
ステップ 3	ip nat translation seconds 例： Switch(config)# ip nat translation 300	(任意) NAT 変換がタイムアウトになるまでの時間を変更します。 デフォルト タイムアウトは 24 時間です。これは、ハーフエントリのエージング タイムに適用されます。
ステップ 4	ip nat translation udp-timeout seconds 例： Switch(config)# ip nat translation udp-timeout 300	(任意) UDP タイムアウト値を変更します。
ステップ 5	ip nat translation tcp-timeout seconds 例： Switch(config)# ip nat translation tcp-timeout 2500	(任意) TCP タイムアウト値を変更します。 デフォルトは 24 時間です。
ステップ 6	ip nat translation finrst-timeout seconds 例： Switch(config)# ip nat translation finrst-timeout 45	(任意) Finish and Reset タイムアウト値を変更します。 finrst-timeout : TCPセッションが finish-in (FIN-IN) 要求と finish-out (FIN-OUT) 要求の両方を受信した後の、または TCP セッションリセット後のエージング タイム。
ステップ 7	ip nat translation icmp-timeout seconds 例：	(任意) ICMP タイムアウト値を変更します。

	コマンドまたはアクション	目的
	Switch(config)# ip nat translation icmp-timeout 45	
ステップ 8	ip nat translation syn-timeout seconds 例： Switch(config)# ip nat translation syn-timeout 45	(任意) 同期 (SYN) タイムアウト値を変更します。 同期タイムアウトまたはエージングタイムは、TCP セッションで SYN 要求が受信された場合にのみ使用されます。同期確認応答 (SYNACK) 要求が受信されると、タイムアウトが TCP タイムアウトに変更されます。
ステップ 9	end 例： Switch(config-if)# end	インターフェイスコンフィギュレーションモードを終了し、特権 EXEC モードに戻ります。

スイッチ データベース管理 (SDM) テンプレートの設定

SDM テンプレートを使用し、NAT に合わせてシステム リソースを最適に設定します。

テンプレートを設定してシステムを再起動した後、**show sdm prefer** 特権 EXEC コマンドを使用して、新しいテンプレート設定を確認できます。**reload** 特権 EXEC コマンドを入力する前に、**show sdm prefer** コマンドを入力すると、**show sdm prefer** コマンドにより、現在使用しているテンプレートおよびリロード後にアクティブになるテンプレートが表示されます。

SDM テンプレートを設定して NAT の動作を最適にサポートするには、次の手順を実行します。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例： Switch# configure terminal	グローバル コンフィギュレーションモードを開始します。
ステップ 2	sdm prefer nat 例： Switch(config)# sdm prefer nat	スイッチで使用する SDM テンプレートを指定します。 Cisco IOS XE Gibraltar 16.12.1 から開始する場合、このテンプレートを利用するには、Network Advantage ライセンスが必要です。以前のすべてのリリースでは、DNA Advantage ライセンスで利用できます。

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 3	end 例： Switch(config)# end	特権 EXEC モードに戻ります。
ステップ 4	write memory 例： Switch# write memory	リロードする前に現在の構成を保存します。
ステップ 5	reload 例： Switch# reload	オペレーティング システムをリロードします。

NAT の設定例

例：内部送信元アドレスのスタティック変換の設定

次の例では、10.114.11.0 ネットワークからアドレス指定される内部ホストがグローバルに一意な 172.31.233.208/28 ネットワークにどのように変換されるかを示しています。その後、10.114.11.0 ネットワーク（本物の 10.114.11.0 ネットワーク）の外部ホストから送信されたパケットは、10.0.1.0/24 ネットワーク由来に見えるように変換されます。

```
ip nat pool net-208 172.31.233.208 172.31.233.223 prefix-length 28
ip nat pool net-10 10.0.1.0 10.0.1.255 prefix-length 24
ip nat inside source list 1 pool net-208
ip nat outside source list 1 pool net-10
!
interface gigabitethernet 0/0/0
 ip address 172.31.232.182 255.255.255.240
 ip nat outside
!
interface gigabitethernet 1/1/1
 ip address 10.114.11.39 255.255.255.0
 ip nat inside
!
access-list 1 permit 10.114.11.0 0.0.0.255
```

次に、重複するローカルアドレスを変換する静的 VRF 対応 NAT 設定の例を示します。

```
ip nat inside source static 192.168.121.33 10.2.2.1 vrf vrf1
ip nat inside source static 192.168.121.33.10.2.2.2 vrf vrf2
```

例：内部送信元アドレスのダイナミック変換の設定

次の例では、192.168.1.0 または 192.168.2.0 ネットワークのいずれかのネットワークからアドレス指定される内部ホストがグローバルに一意な 172.31.233.208/28 ネットワークにどのように変換されるかを示しています。

```

ip nat pool net-208 172.31.233.208 172.31.233.223 prefix-length 9
ip nat inside source list 1 pool net-208
!
interface gigabitethernet 0/0/0
 ip address 172.31.232.182 255.255.255.240
 ip nat outside
!
interface gigabitethernet 1/1/1
 ip address 192.168.1.94 255.255.255.0
 ip nat inside
!
access-list 1 permit 192.168.1.0 0.0.0.255
access-list 1 permit 192.168.2.0 0.0.0.255
!

```

次に、重複するローカルアドレスを変換するダイナミック VRF 対応 NAT 設定の例を示します。

```

ip nat inside source list 1 interface gigabitethernet 0/0/0 vrf vrf1 overload
!
ip route vrf vrf1 0.0.0.0 0.0.0.0 192.168.1.1
!
access-list 1 permit 10.1.1.1.0 0.0.0.255
!
ip nat inside source list 1 interface gigabitethernet 1/1/1 vrf vrf1 overload
!
ip route vrf vrf1 0.0.0.0 0.0.0.0 172.16.1.1 global
access-list 1 permit 10.1.1.0 0.0.0.255
!

```

NAT のトラブルシューティング

ここでは、NAT のトラブルシューティングと確認のための基本的な手順について説明します

- NAT で実現できることを明確に定義する。
- **show ip nat translation** コマンドを使用して、正しい変換テーブルが存在することを確認する。
- **show ip nat translation vrfvrf-name** コマンドを使用して、VRF 対応 NAT の正しい変換テーブルが存在することを確認する。
- **show ip nat translation verbose** コマンドを使用して、タイマーの値が正しく設定されていることを確認する。
- **show ip access-list** コマンドを使用して、NAT の ACL 値をチェックする。
- **show ip nat statistics** コマンドを使用して、NAT の全体的な設定をチェックする。
- **clear ip nat translation** コマンドを使用して、タイマーの期限が切れる前に NAT 変換テーブルのエントリをクリアする。
- NAT 設定をデバッグするには、**debug nat ip** および **debug nat ip detailed** コマンドを使用します。

- VRF 対応 NAT に関連した問題をトラブルシューティングするには、`debug ip nat vrf vrf-name` コマンドを使用します。

NAT のトラブルシューティングの詳細については、を参照してください。 <http://www.cisco.com/c/en/us/support/docs/ip/network-address-translation-nat/8605-13.html>

ネットワークアドレス変換の機能履歴

次の表に、このモジュールで説明する機能のリリースおよび関連情報を示します。

これらの機能は、特に明記されていない限り、導入されたリリース以降のすべてのリリースで使用できます。

リリース	機能	機能情報
Cisco IOS XE Gibraltar 16.12.1	NAT のライセンスレベル	NAT を Network Advantage ライセンスで使用できるようになりました。以前のすべてのリリースでは、DNA Advantage ライセンスで使用できます。
Cisco IOS XE Amsterdam 17.2.1	VRF 対応 NAT	NAT の VRF サポートが導入されました。
Cisco IOS XE Bengaluru 17.5.1	拡張 NAT スケールサポート	グローバルコンフィギュレーションモードで <code>natscale</code> コマンドを使用して、NAT スケールを拡張するサポートが導入されました。
Cisco IOS XE Bengaluru 17.6.1	ダイナミック NAT よりもスタティック NAT ルールを優先	この機能を使用すると、特定のアドレスが両方のルールによる変換が可能な場合に、スタティック NAT ルールがダイナミック NAT ルールよりも優先されるようにできます。

Cisco Feature Navigator を使用すると、プラットフォームおよびソフトウェアイメージのサポート情報を検索できます。Cisco Feature Navigator には、<http://www.cisco.com/go/cfn> [英語] からアクセスします。

